

翻訳を通じてつながる世界文学と日本

沼野 充義 東京大学 大学院人文社会系研究科 教授

[講演の概要]

最近、ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』の新訳が好評で売れ行きもよく、一種の社会現象にまでなっている。その他にも、もちろん、世界文学の古典からハリー・ポッターのような最新のベストセラーにいたるまで、翻訳書は数え切れないほど出版されていて、日本人の読書生活の非常に大きな部分を占めている。2004年の統計によれば、出版総数約56000点のうち、約4900点(8.7パーセント)が翻訳書である。

また従来は文学の翻訳といえば、外国語から日本語への翻訳の比重が圧倒的に高かったが、最近では現代の日本文学が外国語に訳されることも増えてきており、ノーベル文学賞を受賞した大江健三郎や、世界40数ヶ国語に訳され人気の高い村上春樹などは、現代の世界文学の中にすでに確固とした地位を占めているといってもいい。

かつてゲーテは、諸民族の国民文学の間を媒介し、諸民族の精神的所産を交換できるような「一つの普遍的な文学」としての「世界文学」Weltliteraturの到来が近いと力説したが、現代の世界では実際に私たちは、このように翻訳を通じて「世界文学」について語る事ができるし、また日本文学も世界から孤立した特別なものではなく、世界文学の一部として考えることができる。

私たちは世界とつながるために、みずからもっと外国語を積極的に学ぶ必要があるが、その一方で、翻訳こそが現代世界の文学のネットワークを作る本質的なものであることを認識し、翻訳を通じて開かれる豊かな可能性と、同時にそれがはらむ危険や問題(翻訳される書物や言語の偏り、世界的な書籍市場におけるコモディティの弊害、翻訳書の質など)について、もっと意識的になる必要があるだろう。

[プロフィール]

東京大学教養学部教養学科ロシア分科卒業、大学院でロシア文学専攻、ハーヴァード大学大学院留学。ワルシャワ大学講師、東京大学大学院人文社会系研究科教授(スラブ語スラブ文学専修課程)を経て、2007年より同現代文芸論研究室教授。専門はロシア・ポーランド文学。ユートピア文学、亡命文学、ロシア詩の作法を研究する一方で、文芸評論・翻訳に携わり、また日本文学の海外普及事業にも関わり、世界文学を一国一言語の枠を超えて見晴らす方法を模索している。